



清水 義彦（英語教育・教育工学）

23年前の夏は甲子園にいました

2001年8月、私は甲子園球場の3塁側ダックアウトにいました。富山県の小さな市の公立高校が、46年ぶりに甲子園に行く、ということで街はおおいに盛り上がり、アルプススタンド3600席では入りきれず、3塁側一般席までチームカラーで埋め尽くされました。スタンドからの応援はまさに地鳴りのように胸に響き、スタンドとチームの一体感は今でも鮮明に覚えています。それから23年、この経験は私の研究、教育に生きています。私が今やっていることを一言で表すと、「若者の意識を変える仕掛けづくり」です。その手段は、「本物に触れる学習環境の創出」です。この仕掛けの開発・検証を富山県内の小学校、中学校、高等学校三十数校で実践研究しています。23年前の自分には想像できなかった今があります。

高校教員のスタートは、平成に入るところでした。公立の工業高校で働き始めました。教員人生最初の授業は、今までに体験したことがない世界でした。新人の私の授業は成立しませんでした。「なんで英語勉強せんなんがけ？俺ら、就職なんやけど」、と富山弁ですごむ生徒たちへの私の言葉は、彼らの心には響きませんでした。今思うと、実践研究らしきものが始まった瞬間でした。

それから13年、私の授業は変わりました。きっかけは甲子園出場です。甲子園に出場できた要因の1つは、練習試合の組み方にあったと気づきました。ある年の秋季大会、また初戦敗退。試合後のミーティングでは、甲子園に行きたいという部員たちの熱い思いを感じました。そして、「甲子園に行きたいなら、甲子園行った学校（本物）とだけ練習試合しよう！電話してみる。」と言いました。この発言は、甲子園チームの所作、練習の雰囲気を見て、ひとり一人が何かを感じ取り、行動に変化が現れる、という根拠のない仮説でした。5年間続けました。週末は県外の強豪校を飛び回り、超過勤務時間は指導を受ける域をはるかに超えていました。継続は力なりの言葉通りチームの意識は変わりました。日々の行動が変わりました。そして奇跡が訪れました。

翌年、私の仕事の中心が「野球」から「英語授業」へと変わる出来事が起こりました。米国の大学で研究する1名に選ばれました。野球を外から見る立ち位置になりました。帰国後は新天地で、図1につながる授業を10年間自分の授業で実践し、毎年の学会で教育効果を発表して、図1にある授業実践を富山県内の数校で開始しました。

アジア太平洋海外交流学習プロジェクト(Asian Pacific Exchange Collaboration Project)の始まりでした。グローバル人材育成推進会議中間まとめ「豊かな語学力・コミュニケーション能力や異文化体験を身につけ、国際的に活躍できるグローバル人材を我が国で継続的に育てていかなければならない」(経済産業省, 2011)の具体策として、図1のような活動を英語授業の中に定期的に組み込み始めました。参加生徒の英語発話量は回を追うごとに増え、英語学習に対する意識に変容が見られ、外部試験のスコアにも有意差が現れてきました。



図1 教育現場での実践研究の様子
(コロナ禍前のイメージ)

写真の掲載許可取得済

活動開始当時の教室のインターネットの回線速度は遅く、そのままでは実施困難な状況でした。一方この活動は、海外では"Telecollaboration"や"E-tandem"と呼ばれ、第2言語力向上の有効な手段として研究が国外で始まっていることを知りました。スペインのレオン大学で開催された国際学会のKeynote Speechでは、第一人者であるDavid Littleは、「Telecollaborationは最も有望な語学学習法になり得る。Telecollaborationは他国の生徒同士がICTを介して目標言語を用いて他者と協働しながら活動する自律的学習者(Autonomous Learners)育成の教育環境になる。」と熱い語りを直接聴いて、「自分の研究は道を外れていない」と実践を加速させました。参加校は県内34校の小中高に拡大しています。2024年度は県庁の方々とは協働し、庁内チャレンジコンテストの最終候補にも残り、募集を開始しました。新たに13校が加わる予定です。

このように実践研究が進めば進むほど学外に出る機会が多くなりますが、23年前の甲子園への途上で得た経験は、学内の1年教養ゼミでも生きています。ゼミ活動での本物は企業人です。学生が、4年後(6年後)に働き始める社会で活躍する企業人が、4月早々に教室にやってきます。企業人が求めるレベルの課題解決策を5週間で仕上げる講座を始めて7年目、毎年学生は講座を通して入学時の力と意識を変えていきます。主体性など「社会人基礎力の12の構成要素」は、いい方向にどんどん変容していっています。個々の将来を見据えて、学部教育や大学生活に意義を見出し(意識)、社会人の素地を固め(行動)、社会に羽ばたいてほしいと願っています。本コラム2周目があれば、ぜひゼミのお話させていただきたいと思います。

教員人生で協働してきた若者のお話をさせていただきました。彼ら彼女らより変容したのは、間違いなくこの私だった、と本コラムを書き終えてそう感じました。